おわりに

「科学の芽」賞設定の発端になったのは，朝永振一郎生誕100年祭を筑波大学・京都大学・大阪大学が企画実施したことによります。筑波大学の物理学研究室は東京教育大学時代の朝永振一郎先生の影響のもとに，世界的な業績を挙げてきています。

平成18年度に企画実施されたこの生誕100年祭に合わせる形で，青少年向けの「賞」を出したらどうかという提案が附属駒場高校の副校長の小林汎氏（現筑波大学教授）から出され，私は二つ返事で承諾しました。

まず，賞の名前をどうするかで頭を悩ませました。物理学は専門外である私は，まず朝永振一郎先生の単行本（文庫）を買い求め，眼を通してみました。その本の1冊に，本書の冒頭で岩崎学長が紹介している「科学の芽…」のフレーズを発見しました。

このフレーズを活かさない手はない，と私はとっさに判断しました。この詩はすでに知られていたものでしたが，私個人にとっては正に発見でした。

賞の名称については，準備委員会でいろいろ議論した結果，「科学の芽」賞とすることに決定しました。実はこの名称が大きくその後の賞を支えることになりました。どこかこの賞を後援してくれる新聞社をさがそうということになり，昔から「教育の森」など，教育問題に大きな貢献をしてきた毎日新聞社にお願いすることになりました。個人的なつながりもあって，無事毎日新聞社をはじめ，時事通信社，日本教育新聞社の後援をいただくことができました。また，日本物理学会，日本物理教育学会，日本科学教育学会，日本理科教育学会など諸学会の後援もいただくことができました。

準備は着々と進み，広報のためのポスター・チラシを作成することになりました。ここでも友人のグラフィック・デザイナーの原孝夫氏が全面的に協力してくれました。

いろいろな方々のお力添えで無事2006年度の「科学の芽」賞の発表会と表彰式が行われました。筑波大学に小・中学生が来ることなどまずないのですが，受賞者と家族の方々が見えると，大学も明らかに若返ったような気分になりました。

もともと，このコンクールは単年度で終わる予定でした。しかし，参加した学長も副学長も子どもたちの英知に触れ，さらに続けたいという機運が高まり，ついに今後も継続することを大学として決定しました。

筑波大学は戦前からの歴史から見ても，内外の教育界に大きく貢献してきた大学であることは言うまでもありません。その大学にこのような青少年向けのコンクールが誕生したことは大いに誇っていいことだと考えます。

時あたかも教育課程の改訂期に当たり，理数科離れが巷間話題になってきた時期でした。自然科学や理科教育のさらなる発展のために，筑波大学が一役でも二役でもできればこれほど嬉しいことはありません。

私自身は柳田国男という民俗学者の研究をしてきました。柳田は日本民俗学の創始者として知られますが，教育についても実に多くの発言を行ってきました。柳田の教育論の根底にあるのは，子どもの生活上の素朴な疑問から学問を出発させなければならないという明確な意識です。子どもの持つ疑問こそ学問の出発点であると終生主張し続けました。「疑問」「問い」を中核に据えた教育論が，実は柳田国男の教育論の本質となっています。

この思想は，朝永の「科学の芽」の発想と基本的に同じものです。しかも，時代を超えて当てはまる真理です。世界的に日本の子どもたちの学力低下が問題になっていますが，肝心な点は，科学や学問への基本的な姿勢をきちんと身につけることです。

「科学の芽」賞は，今後も日本，いや世界の子どもたちに向けて発信し続けていきます。

このプログラムを実施するに当たっては，実行委員会の委員のみなさんはもちろんですが，附属学校の理科教員と附属学校教育局の事務のみなさんの献身的な貢献をいただきました。心より感謝いたします。

「科学の芽」賞実行委員会委員長

谷　川　彰　英